子母澤寛全集　十七

国定忠治　明月赤尾の林蔵　他

編集委員　司馬遼太郎　尾崎秀樹

講談社

子母澤寛全集17

国定忠治　明月赤尾の林蔵

昭和四十九年三月二十四日　第一刷発行

著　者　子母澤寛

装幀者　辻村益朗

発行者　野間省一

発行所　株式会社講談社

東京都文京区音羽二―十二―二十一　郵便番号一一二

電話　東京(〇三)(945)一一一　大代表　振替　東京三九三〇

印刷所　凸版印刷株式会社

製本所　大製株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえ致します

© 梅谷龍一　1974

0393-251673-2253 (0)　(企)

子母澤寛全集第十七巻　目次

国定忠治……五
落葉街道……七
馬場の欅……一三
処成敗……二二
木枯し……四九
二つ首……六三
春……七五
籾蔵横丁……九七
大川端……一〇三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

女……一二三
海……一三八
東の空……一四〇
はつ雁……一四八
熊鷹……一五八
秋の灯……一六九
みぞれ……一七四
雪道……一八二

明月赤尾の林蔵……一九五
鬼心仏心の巻……一九七
三界輪廻の巻……三九〇
辺見虎喜智……四五九
解説・尾崎秀樹……四七四
付　関係写真＝写真・榊原和夫

国

定

忠

治

落葉街道

武州の日野から、十三文の渡し銭、多摩川を渡ってすぐに柴崎。その渡船場の上手、川原の砂利ッぱらで、褌一つの素ッ裸で肌についた銀の粒のような水を拭って、大急ぎで着物を着ている男がある。二十四、五、がッちりした体つき、月代がちょっと延びて、左の小手に刀の痕が一つあった。

冬の陽がもう斜めに落ちかけている。ことに侘しいむさし野の冬。雑木林が川原につづいて、欅や山毛欅の赫い枯れ葉が、今にも音を立てて落ちそうである。遠くの森に、ほんのりと夕靄が流れて、風は無かった。

やがて、さんど笠を小脇にして、歩き出した男の速足——風のような速足だ。結城木綿の着物に、黒の手甲脚絆、ぐるりと廻した半合羽。裾取りをして、その合羽の下から、鉄ごしらえの脇差の鐺が見えている。

柴崎へのかかり鼻に、武州から甲州へかけての暮れかかる紫色の山々を前にして、酒肴おん休処、一膳めしの定見世が一軒ある。さっき川を渡船で上った人達が一休みしたようだが、もう皆んな腰を立てて、履きかえた草鞋などが二つ三つその辺に棄ててあった。

この茶見世のおやじ、ちょいちょい首をふって、そこから川原の男を見ていたが、小さく肩で笑って、

「月を越せば師走という凍るようなこの川を着物を頭に、首まで漬って徒歩渡りをするなどという、世には無法な男も有るもんでござりますなア」

よしずの蔭へ話しかけた。

「おやじさんなんぞは、堅気な渡世、一文二文の商売でも、塵も積って山となるで、浮世の苦労は知るめいが、あんな小気の利いた服装をしてても、どうせ御法度の裏を行く無職、恥しながら懐中にゃア十三文の渡し銭が無えという訳さあ」

「はは」

「その代り、ああした奴は、一盆ぼかりと目が出りゃア、その場限りお大名に早替りだ」

声の主の顔も姿も見えないが——。

「さっきの話でお前のせがれは、江戸へ奉公とか言っていたが、しっかりと目をつけて、冬の最中、多摩川十七里、水が荒れえ聞こえた流れを、裸で渡るような男にしちゃアならねえぜ」

「有難うございます」

「時に、すまねえがうどんの下地を煮えくりけえるように

熱くしといてくんねえよ。腹の減った時の食物に、中休みは禁物だ。立てつづけに二、三杯行けるようにな」
「え――？」
「何アに、俺が喰うんじゃアねえ。あの河童の御落胤様に喰わせるんだ」
「おうや、然様でござりますか」
「何んだアおやじさん、もう見世もお終えだろうに、落着いて感心していなはんなよ。気を利かせて、酒も五、六本はぶち込んで置きねえな」
「へえ、へえ」
烏が二、三羽、短く啼いて、街道を横っ飛びに、前の高い一本松をかすめて行った。
さっきの男は、川原から街道へ出て、ちらりと見世の内を見たが、さっとそっぽを向いて、すたすたと通る。
「おう、兄イさん、失礼さんだがお近づきが申してえ、一寸、おみ足をお止めなすっておくンなせえよ」
よしずの中から、声をかけた。
「誰だ、え？」
眉が、ぴりりと中に寄って、睫毛の濃い男の眼が、きらりと光ったが、それでも足がじッと停まった。
「あッしですよ」
よしずの中から、立ち上がって、半分こっちへ姿を見せたのは、口の利きようとは似ても似つかない旅の坊さん。鼠の着物に、墨染の法衣を着て、白い脚絆、でっぷりと肥って、三十五、六になっている。
「ふン。お前あの時の坊主だな」
「如何にもあの時の坊主。野州板橋在善王寺を、追っ払われてもう十年。法衣の方たアとッくの昔に縁切れだが、此奴ア時にとって役に立つので着ているというまでなんだ。坊主坊主といいなはんな」
「頭を剃って法衣を着てりゃア、坊主に違えねえじゃアねえか」
「はッはッはッ」
と、その坊主、大口開いて笑いながら、手を上げて、男の肩を打つ真似をして、
「兄イさん、まだあの時のことで腹を立ててるんだね」
「当りめえだ。忘れて堪るもんか。うぬアあの時、うまく化けていやがったが、小仏峠の休み茶屋で、雲助相手の丁半ばくち。坊主だからと油断をして、一文なしに取られてしまった。そのために、俺ア三日三晩食わず飲まずのひでえ目を見たんだ。あれは去年の春の話よ」
「ところが、今度の河童の真似はまさかこの坊主のせいじゃアあるめえね。兄イさん、いい若えもンが渡し銭の十三文に事欠いて、ざぶざぶのぶるぶるたアちっとばかり不粋だね」
「えッ、この坊主見ていやがったのか」
「開けッぴろげの多摩川原だ。見るも見ねえもねえさ」
「畜生ッ。飛んだところを見ッちまいやがッたな」
「時にあん時の勝ちっ放しの厄落し。一ぺえ上げてえ、腰を下してくンねえよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

見世のおやじ、人馴れたもんで、にこにこしながら、
「さア、親分さんどうぞこちらへ」
いったが、男、むッつりして、
「いやだ」
坊さんは、すぐに男の合羽をつかんだ。
「まア、そういいなはんな、坊主泣かせりゃ七生祟る、何をおいても、兄イさん、坊主の面ア立てるもんだよ」
うどんの下地の鰹節の匂がぷーんとした。酒の匂もぷーんとした。昨日からまる一日、飯粒一つ喉を通らぬ飛んでもない空ッ腹で、凍るような思いをした男。それでも、
「いやだ」
「ふーむ、不承かね」
二人とも暫く黙っている。
途端に、きゃ——んと犬の泣声がした。誰かに石でもぶつけられたのだろう。尻ッぽを内へ丸めて、とッととッと、見世の前を走り過ぎた。
それを追うように、右手へ小石を振り上げて、にたにた笑って、半分はからかい加減に街道に姿を見せた男がある。土足裾取りをして一本刀、どこから見ても御同様のやくざもん。まだ二十二、三の生ッ白い男だが、頬っぺたに赤痣があって、左の方が眼ッかちだ。
ちらりと此奴を見て、
「野郎！」
突立っているこっちの男が、つぶやいた。呟いたと思ったら、もうからだはぱッと外へ出ていた。真直ぐに眼ッかちの方へ——。
「あッ！」
いいようのない甲高い声がした。街道に黄色い土煙が立ってばたばたと足音が乱れ合って走る音がした。そして、次には、もう針のころんだような些細なことさえなかったような顔をしてこっちの男は、よしずの内へ戻って来た。
「どうした兄イさん？」
「何んでもねえ」
地の底から湧くような人間の唸る声が、低く聞えた。坊さんは、一寸、浮き腰になったが、また落着いて、にたりと男を見て、
「可哀そうに腕の骨でも折られたか？」
「ふん」
男は、きらっと眼を動かしただけで、黙って、そこの縁台へ置いたさんど笠を取ると、
「埒もねえ手間ア取らせやがった」
ひとり言で、行こうとした。
「まア兄イ待ちねえな」
立って、前へはだかるようにして、
「実アお耳に入れてえことがある」
「何んだ？」
「話ア長えんだ、兎に角、酒を——」
「いやだ」
「聞きしに勝る剛情だねえ」
「おい、坊主、冬の日だ、短けえんだぜ」

「兄ィさんのこれから目ざすのァどうせ府中宿の貸元万太郎さんと当りがついているんだ。二里と七、八丁、急ぎなはんな。日が暮れて、おっかねえ、お前さんでもあるめえ」
「お世話だ」
「兄ィさん。お前さん、万太郎さんとこの一件を知って行くのか知らねえのか？」
「何をよ」
「知らねえね。万太郎さんは縄張一切合財元の親分藤吉に召し上げられて、女房子を抱えて、今では三度のおまんまも楽じゃァねえという噂だ。そんなところへ飛びこんで、その空っ腹を納得させるつもりかよ？」
男の眉が深い八の字によった。一寸驚いた様子だったが、すぐに大口を開いて、
「坊主、嘘をつくねえ、あの人の親分藤吉は八丈じゃァねえか」
「その八丈から三宅へ移っていたが、今度御赦になって娑婆を見たんだ」
「う？」
「誰が考げえたって理窟じゃァねえ。二た昔も前に島へ行った親分の縄張を守って今日迄にした万太郎さんだ。それを、元の親分がけえったからって、その日に困るうき目を見るたァ、おかしなこったよ」
「そうだ」
男は、何時の間にか、薄べりを敷いた縁台へ腰をかけていた。
おやじが、坊主の目くばせで、うどんと酒を、男の鼻っ先へ持って来た。
冬の日ぐれの土間に、その湯気が煙のように立っている。
また人の唸る声が消えるように耳へ入った。坊主と男とは、ちらりと顔を見合せたが、互に、ふふンと笑っただけで、
「彼奴ァ、俺も何処かで見たような事があるが、何んてえ若えもんだっけなァ」
「生れァ上州。ごまの蠅でばくち打ち、誘拐で諜者もするんだ」
「ああ然様然様。俺アそのごまの方で彼奴を知っていたんだっけ」
「おい、坊主、あんな奴ァどうでもいいんだ。そ、そ、それで万太郎親分はどうしていなさる？」
「万太郎さんは根がああした仁徳ないい人だ、別に欲をいうんじゃァねえんだ。ただ娘一人親子三人、おまんまが食べられるだけのかすりでよござんすと、涙を流して頼んだそうだ。其奴を藤吉が、そっぽを向いて、俺のいねえ間に上った俺の寺銭はびた一文でも積んで置くのが当り前だ、誰に断って費った。ざっと積っても万の金だ。俺ァ其奴もけえしてもらいてえんだが、言ったところで無理だからまアいいとする、その代り、これから先は一文もやれねえ、というんだってなァ」
「ひでえ畜生だ」

「六十幾つの白髪頭、聞いただけでも、腹が立つが――さて俺にゃア赤の他人で、どうにも出来ねえ。あの仁のところで草鞋を脱いで世話ンなった旅人も山とあろうが、さて皆んなこれを聞いても、聞いて聞かねえ振りをしているそうだ」

二人とも暫く黙って、別々なことを考えながら――。烏がまた啼いて飛んだ。おやじは、二人の話に釣込まれながらも、人の唸り声が気になってならなかったが、一寸、この場は脱せない。で、

「ど、どうです、親分、うどんが冷めます、酒も――」

男、ぐっと睨んで、

「おやじさん、親分親分は勘弁してくれ。俺ア名もねえ三ン下だ」

「へえ。でも、折角のお酒も冷めますし」

「知った事かえ」

男は、ひらりと立ち上がって、

「坊主、あばよ」

草鞋の足で、とんとんと、二度ばかり地べたを蹴って、出て行こうとした。

「おう、忠治郎さん、寸志だ、うどんを喰って行ってくれ」

「え？　忠治郎だと――？」

「目がねに狂いはねえ筈だ。上州は佐位郡、国定村の忠治郎兄ィ。申し遅れたが、俺ア今もいう板橋在善王寺の坊主上り、化けちゃアいるが、ちょっとばかり体の急わしい晃円という、無職は昨今の駆出しもんだ、見知っておいてくンなせえ」

忠治郎は、腹を抱えるようにして笑い出した。

「何アんでえ、俺の名前まで知っていやがる。如何にも俺ア上州生れ、長岡忠治郎という奴に違えねえが、お前のような薄っ気味の悪い坊主に名を知られる程の面じゃアねえんだ」

「そうかねえ――そんな事アどうでもいいさ。とにかくまア、うどんを喰って下せえ。寒さに空ッぱらは毒だ」

「いや、喰わねえ」

忠治郎は、そのまま二、三歩とっとっと歩いたが、つと、振返って、

「坊主、万太郎親分程の仁だ。その日に困ったって真逆に、あのお光さんを、売ったり叩いたりはしめえけれど、お袋のお次というのア継しい仲だ。大丈夫かなア？」

「半月前に俺が噂を聞いた時ア、まだ其処まで行ってなかった」

「そうか――」

と忠治郎えくぼを見せて、

「あばよッ」

二度目をいって、前こごみに、とッとッと黄昏れる甲州街道を、やがて、煙るような、雑木林の角を曲って行って終った。

晃円は、暫く上眼で、軒の端から、暮れて行く薄暗い水底のような、寒い空を見詰めていた。白い雲が、高く、小

刻みに流れている。
　おやじは、さっきの奴の唸り声が、気になって堪まらないが、晃円がまるで此奴を忘れたようにしているので、それをほッたらかして、行って見るという訳にも行かず、じりじりしている。尤も、ところがら、渡し船の客などの、喧嘩のあげくの斬った擲ったには、いくらか馴れているんだが――。
「瘠せ我慢の強え男さ」
　半分ひとり言にいって、晃円ゆっくり立ち上がり、ぽーんと小粒をおやじの前へ投げて、
「飛んだ剛情な奴だったっけ」
「全く」
「あの男アな。ゆうべ郡内勝沼で、わらじをぬいだ奴の家が、余り御難がひでえところから、財布ぐるみ一文残らず置きッ放しで、夜の夜中に出て来たんだ。おらあ一足先になって、ここの渡船をどうするかと見ていたんだが――面白え奴だなア」
「へえ」
「だが、もう日が暮れるというのに一食もしねえでよ――。はッはッはッ。それじゃアおやじさん御免よ」
　落ち葉がした。遠くで、馬の鈴の音がした。
「どうも、有難うございました」
　おやじが、お辞儀をする間に、晃円はすたすたと、府中宿の方へ向ったが、急にまた引返して、唸っている男の方へ――。
　真ッ赤になった漆の木を交えた雑木林があって、その前の黄色い枯れ草の上に、男が突ッぷして、土をかむようにして唸っているのだ。
　おやじも、すぐ晃円について行った。晃円は、突ッ立って、じろりと男を見下ろして、
「おい、諜者！　彼奴ア、やがて日本国中に飛ぶ鳥落す男になるんだ。てめえ、あやかるように、折られた腕を大切にして置け」
　唇を紫色にした眼ッかちが、人の気配を感じて、歯を食いしばって、漸く顔を上げた時には、晃円の白い脚絆の足は、とっくの昔ずッと向うに歩いていた。
「とッさん、助けてくれ」
　男は、顔をしかめて、ぼんやり立っているおやじを見て、泣くような大きな声を出した。
「おりゃアさッきの男に腕を折られた。助けてくれ、とッさん」
　その辺に血は出ていない。その代り、どうしたのか、物をいう度に、口の中から、たらたらと血が流れて、咽喉から胸へぽたりぽたりと落ちた。
「助けてくれッたって？」
「いや腕なんざあ、どうでもいい。駕籠を一つ見つけてもらいてえんだ。おりゃア急ぎの旅をかけているんだ」
「駕籠？」
「銭アいくらでも出す。今夜の中に、小仏を西へ出なくちゃアならねえんだ」

「そんな事いったって、駒木野のお関所はそれまでには御門閉めになりますよ」
「いいや、いいんだ。何んでもいいから駕籠をたのむ」
「か、か、駕籠もいいが——お前さん、どんな急用か知らないが、どんな用でも人間、命には代えられないでしょう。川を渡るよりは、一先ず府中へ引返し、その腕の手当をした方がいいじゃござんせんか」
「いいや、そうしちゃアいられねえんだ。おやじさんたのむ、駕籠を、駕籠を——」
「お前さんもまた剛情だねえ。とにかくまア、わしの見世まで来なせえまし」
後へ廻って脇の下へ両手を入れて抱くようにしたが、眼ッかち悲鳴を上げて、
「あッ痛え痛え。痛くッて、おりゃア今にも死にそうだ——おやじさん、ど、ど、どうすりゃアいいんだ」
「だから、だからですよ、府中宿へ引返して——」
「いや、いけねえ。あすこへ引返して、今度見ッかったら、おらア国定の忠治郎に、殺される——殺される」

馬場の欅

府中宿——。
何時の間にか、風が出ていた。寒い風で、枯れ葉が、白ッちゃけた往来のところどころへ、淀みのように集まって、風の度にがさがさと、右へ流れ、左へ流れた。星が、黒い空にきらきらしている。何処かで、按摩の笛がしている。小商いの店と、火の番小屋の灯が、ところどころ、往来へ火影を曳いている。時刻はもう六ッ半。
馬場の大欅に、時々、風が鳴った。その馬場近くに、ぽかりと灯を見せて煙草の見世が開いていたが、風に送られるように、
「今晩は」
客が入って来た。
客といっても、かめのぞきの手拭でかたく頬かむりをした笠も合羽もない旅人姿。草鞋の素足に泥がついている。多摩川べりから、空ッ腹を抱えて飛んで来た忠治郎だ。
「へえ」
店つづきに何か仕事をしているらしい男の声がした。出て来たのは、ばアさんだ。
「すンません。お客じゃアねえんです。実ア、一寸、おたずね申してえことがあって——」
「何んじゃなア」
「このお向うに、万太郎さんとおッしゃる親分さんがお出でと承って、おたずね申したところ、家は空き店になっておりやすが——あの親分さんは、どちらへお引越しでござんしょう。お教えいただきとうございますが——」
「ああ、親分さんところですかえ」
ばアさんの声の終らぬ中に、さっきの声の主らしい男

が、顔を出した。
「いらっしゃい。おや、旅人さんでございますね」
「へえ」
「あなた様は、万太郎親分さんとはどんな御関係でござりますかね」
「へえ。盆業渡世、御厄介もンに御座んすが、まだお目通りは致して居りません」
忠治郎、嘘をついている。草鞋をぬいだことも三度四度、ことに娘のお光ちゃんとは——ふふッと心で笑ったが、白を切った。だが、その調子で、煙草屋の主人は、敵か味方かの見分けがついたものらしく、急に声を低くして、
「どうも、お気の毒でしてねえ。ねえ、おばアさん」
「そうだよ。わたしゃア、思い出してもぞッとするよう」
「え？　一体どうなさいましたんで」
「つい二、三日前、この先の馬場の大欅の下で、殺されたんでございますよ」
「えッ！　殺されたア」
忠治郎、つつッと前へ出た。あの眼が、稲妻のように閃めいて——。
「殺された？　誰に？」
「それがねえ——」
「よしッ、其奴アいい。で女房子は？」
「その同じ晩に行方知れずになったんですよ」
「え！　すンません、後生だ。詳しい話がお聞きしてえ」
頬冠りの手拭を、ずっと引いて、これを鷲づかみにしたまま店の上りがまちへ、丁寧な挙が下りた。
晴れてはいるが、ゆうべから吹き続いた空ッ風。鳶が地上から飛ばされたように舞い上がっている。光るような水に雑巾を入れて、尻ッからげ。格好のつかない襷をかけて、島帰りの藤吉親分の格子戸の内を一生懸命に洗っているのは国定村の忠治郎。尤も名前も素姓も面をかぶって上州は上州だが、玉村の伊之吉と化けている。何処から見ても忌やにへえへえするから駄羅仕のねえ三ン下奴の渡り鳥で、此奴、一生、他人様の冷飯を食って成仏する奴とより見えない。
藤吉不在中、名代に立った万太郎を助けて、脇差の下に危ないからだを張った少々は骨っぽい古い子分達は、みんな藤吉の勝手な仕打に愛憎を尽かして、旅をかけて終った為か、あれ程万太郎とは馴染の深い忠治郎の面を見知った奴が、一人もこの家へ来て居ないのも不思議。名も戒名もない駆出しばかりがうようよしている。

上州名物赤城のお山ょウ
山は照る照る麓は曇るょウ
曇る中から唄の声よウ

忠治郎は、ざぶざぶと、土間の三和土に水を流し込んで、馬鹿に大きな声で唄ったもんだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com